

# 月刊ウィーン

## GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙  
おかげさまで今年は創刊25年目  
創刊1989年 No.283

2013年1月号





# 杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 16



さる十二月十〜十二にかけて、原子力の熱流動と安全に関する日韓シンポジウムが別府で開催された。このシンポジウムは、アジアばかりでなく世界の原子力主導国である我が国と韓国が連携し、原子力の安全と性能の向上に寄与することを目指すものである。一九九八年に韓国の釜山で開催されたのを皮切りに、二年毎に日韓で交互に開催されており、今回で八回目になる。我が国から九六名、韓国から五七名、スイス、イタリヤから各名の計二五五名の研究者、技術者、学生が産業界、研究所、大学等から参加した。

京大からは同僚の功刀教授と筆者が参加した。六セッションの招待講演、二三の技術セッションが三会場に分かれ、三日間で計二〇〇件の発表があった。

筆者は、二日目朝一番に「福島事故後の重要なシビアアクシデント研究課題」と題する基調講演を行った。我が国のシビアアクシデント研究やシビアアクシデント対策整備の経緯、日本原子力学会で検討中のシビアアクシデント研究課題について紹介するとともに、内外の検討状況と私見に基づき、福島事故以降に重要度が増したシビアアクシデント研究課題について説明した。発表に対し韓国から二件の質問があるなど、関係者にとって多少とも参考になったと思われる。

学生を対象としたプログラムが前の週にあつたため若手の参加が多かったこと、個人的には韓国のシビアアクシデント研究者と再会できたことが特筆される。

さて、今月のウィーンと京都の類似点では、一九世紀の欧州及び我が国が大きく転回する契機となつた会議について述べてみたい。一八一四年九月から開催されたウィーン会議は、オーストリア外相メッテルニヒが議長を務め、フランス革命とナポレオン戦争終結後の欧州の秩序再建と領土分割が目的であつた。各国の利害が衝突して遅々として進まず、会議場となつたシェーンブルン宮殿で毎夜開催された舞踏会にちなんだ「会議は踊る、されど進まず」と評された。一八二五年三月にナポレオンがエルバ島を脱出したとの一報が入ると、危機感を抱いた各国の間で妥協が成立し、一八二五年六月にウィーン議定書が締結され、いわゆるウィーン体制が確立された。



一方、京都では幕末の混乱を回避するため、一八六七年十月に徳川慶喜が上洛中の四十藩の重臣を二条城に招集して大政奉還を諮問し、朝廷がこの結果を受け入れ大政奉還が成立した。この年十二月の王政復古まで多少の紆余曲折はあるが、大政奉還は江戸幕府の終焉を象徴する歴史的大事件である。ウィーン会議に比べれば即決で明治以降の大



きな方向が決まつたと言えよう。先の十二月の衆院選を前にした十二月三日、石原前都知事が橋下大阪市長と京都ホテルオークラで会談したが、このホテルのある場所は明治維新を担つた長州藩が屋敷を構えていたことが選ばれた。薩長連合の故事が現代に生きているのである。

余談であるが、筆者がウィーンに赴任した二〇〇四年四月、趣味のスケッチで初めて描いたのがシェーンブルン宮殿だつた。その日は好天だつたがまだまだ寒く、丘の上には氷が残つていた。描き終えようとすると若い女性が話し掛けて来た。ウィーン芸術大学に通う米国出身の学生だと言ふ。彼女が描いた絵を見せてもらい、共通の話題に大いに話が盛り上がった。うっかり彼女の名前を聞くのを忘れたが、中高年としては若い外国人女性との会話に楽しい時を過ごした。懐かしい思い出を込めて、そのスケッチを掲載させて頂く。



■杉本純 京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長■